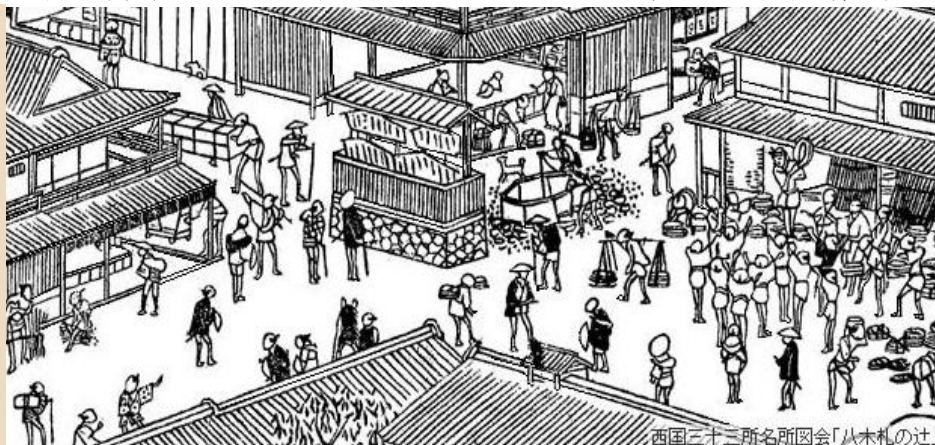


大和八木 まちづくり 新聞

No.04
2011年
2月号

特定非営利活動法人八木まちづくりネットワーク



西国三十三所名所図会「八木札の辻」

NEWS

■ JAF Mate 3月号に八木紹介

関西のドライブ情報「日本風景街道を往く」の記事の中で2頁にわたって「日本文化のクロスロード(横大路・下ツ道)」として八木地区の紹介がされています。ロードマップとともに近隣施設やグルメ店などの特別優待券、プレゼント情報も掲載されています。

ドライブのモデルコースは地元でも役立ちそうですのでご覧ください。



■ 2/8 南都経済センター取材

南都銀行のシンクタンク「南都経済センター」の月報「地域情報」コーナーへの掲載を八木に取材にきていただきました。NPOの活動を説明した後、八木の町歩き。駅近の立地で歴史的な町並みに似合う店舗を工夫すればもっといい町になるのでは、とアドバイスもいただきました。写真は近代化遺産として貴重な畝傍高校です。



■ 2/7 担い手事業報告会 東京

持続可能なストック型の社会への転換や質の高い住宅を長期使用していくための市街地環境の整備が求められている中、八木ネットでも「住まい・まちづくり担い手事業」(国交省)の支援を受けた活動をしています。今回、支援対象団体と建築専門家・地方公共団体等との情報交換と活動報告の会が開催され参加しました。各地の同様な問題における活動例に学ぶいい機会でした。NPO八木ネットの事業内容は別号にて改めて報告します。

■ 2/5 五條新町でセミナー



昨年末に重要伝統的建造物群保存地区として県内で今井・宇陀松山に次いで選定された五條新町で「アートde新まちづくり」と題して、まちづくりセミ

ナーが開催され、五條新町の成り立ち、二見城の城下町として賑わった往時の様子など聞きながら町歩きしてきました。(4頁に続く)



■ 1/14 祭りともまちづくりシンポ

祭りをまちづくりに生かす取り組みを考えるシンポジウムが関西大学で開催されました。

事例報告の後、一式飾りで有名な出雲平田地区や大阪八尾・八尾木の造り物の継承問題や、丹波成松や奥出雲大呂の愛宕祭紹介などの地区間の交流で八木愛宕祭の立山自慢もしてきました。



八木歴史講演会『幕末の大和と谷三山』

講師：谷山正道先生(天理大学 歴史文化学科歴史学教授)



代将軍家光から長らく鎖国を続けていましたが、幕末になると、産業革命を行った欧米列強諸国がアジアに進出し、開国を迫ってきました。前年にペリーが来航し、嘉永七年(1854年)に開国、翌年には通商条約を結び、開港します。



そのころ国内では、尊皇攘夷運動と公武合体運動が対抗しながら展開し、その後幕府を倒して中央集権を願う倒幕派により、明治維新にいたります。(尊皇攘夷運動/天皇を頂点に外国勢力を排除したい動き、公武合体運動/朝廷と結んで幕府や諸藩が力をつけようとする動き)

今日の課題は、そんな激動の幕末期に、私たちが住む大和の人がどんな問題に直面し、どのような思いを抱き、どのような活動を展開するようになったかです。またその際、幕末の大和を代表する八木の儒学者谷三山の言動にも触れながら話してみたいと思います。

高取城と谷三山

大和五條の森田節斎の言葉に「高取に過ぎたるものが二つあり 山のお城に 谷の昌平」があります。

これは、高取城は二万石余りの高取藩にしてはふさわしくない大きな立派なお城で、豊臣秀長の時代に郡山城を宇陀の秋山城とともに支えたといわれる百万石クラスにも値するお城です。現在、日本三大山城のひとつにも

数えられています。そうした山城があったことと、そのころ八木が高取藩だったことで、儒学者谷三山(谷昌平)の存在をあげています。

内憂外患の深まり

欧米からの外圧を受け、開国にいたる時期に、相次いで地震とコレラ(コレラ)の流行が起き、まさしく内憂外患の深まりが見えます。

こうした際、八木の谷三山は嘉永6年9月に、『靖海芻言』(せいかいすうげん)という外交を解決する意見書を著わしました。

しかしせっかく書かれたのにかかわらず、幕府には届かなかったことが後の書物でわかっています。『靖海芻言』は一万数千語に及ぶ膨大な意見書で、「今の時点での開国には反対だが、西洋の学問に目を向けて西洋のいいものは積極的に学び、国力の充実をはかるべきである。」とあり、闇雲の開国拒絶論ではないことがわかります。

谷三山(たに さんざん)について



高取藩の南八木に享和2年(1802年)、三男として生まれます。実家は米穀の売り買いをされている豊かな家でした。三山は耳が不自由で十代でほぼ聞こえなくなり、さらに幕末には目も見えない状態になりました。

日常の仕事が難しいのですが、家

が豊かであったお陰で、書物を読む読書三昧の毎日だったといわれています。学問についてはほとんどが独学で、中国の儒学・歴史書、日本の歴史書、ペリー来航の前には当時の欧米列強諸国のありようなど海外の事情の関係書も読んでいて、大変視野が広がったといえます。

さらに注目されるのは、28歳のとき、京都の儒者猪飼敬所(いがいけいしよ)と筆談した際、敬所は谷三山の学識に対して

『清儒の博治(はくこう)にも勝るべし、老拙の及ばざるところ』

(多くの学問に長け、年季を積んだ自分も及ばないほどの学識だ)

と驚いたといわれています。その後交流は続き、5年後には敬所は八木を訪れ4日間筆談して過ごし、2年後『相在室』(筆談の室の意)という扁額を三山に送っています。

そして天保11年(1840年)家塾「興譲館」(こうじょうかん)の規約をまとめます。

当時の門人帳によると50名余りを数え、田原本の吉村抑亭、田井庄の森鉄之助、天

理備前の上田淇亭(うえだきてい)、高田の岡本通理(つうり=黄中)、宇陀松山の久保耕庵・良平(種痘で有名)、小房の前部重厚(しげあつ)ら歴々たる弟子が学んでいました。遠方は備中からも門人があったようで、多くの人がこの八木の谷三山のもとで学ばれたようです。(上の扁額は谷三山(操)筆「勤分舎」旧平田家所蔵)

天

保14年(1844年)には谷三山は高取藩から名字帯刀を許され禄をもらうようになります。門人外でも大和の儒者森田節齋(せつさい)や長州の吉田松陰(しょういん)も教を請うたこともありましたが、松浦武四郎(「北海道」の命名者)も谷三山を訪れたことをここに紹介いたします。(資料:『大和百年の歩み』大和タイムス社、1970)

谷三山の手紙から

高取藩の築山愛静(あいせい)と交流があり、三山の手紙が残っています。注目すべきは、谷三山は欧米の強国の国内事情に通じているのそれらに学びつつ国力充実、とりわけ学校教育制度の整備の必要性を唱えていることは、広い視野をもった上の発言であると思います。

吉田松陰の来訪

数年前から諸国平戸、長崎、江戸、東北、近畿を訪ねて著名な学者などに会い、見聞を広げることをしていた吉田松陰は森鉄之助の紹介で八木谷三山を訪れることになりました。

鉄之助は吉田松陰を「篤実な人物で学問を学び実際に役立つ志を持っているので、快く話してほしい」と三山に紹介しています。二人のやりとりについては資料が残っていませんが、対外策や儒学について筆談したのではないかと思います。

谷三山に教を請うてからの吉田松陰の行動をみると、長崎に下りロシアの船に乗って海外に行こうとし、翌年嘉永7年にも下田でアメリカの艦船に乗り海外に行こうとしたが、結果自首しています。

これらのできごとは、谷三山との筆談の中で海外の事情をきちんと認識

すべきことを語ったのではないかと、またそうした言葉に大いに刺激され、吉田松陰は海外に渡りその事情を自分の目でみたいと思っていたのではないかと、つまり谷三山が吉田松陰の活動に大変大きく影響を与えたのではと思われれます。(左写真:谷三山の生家)

地震とコロリ、大和にも

親条約が結ばれた嘉永7年は地震でパニックが起きた年。最初は6月14日伊賀上野で、続いて11月4日東海地震、11月5日南海地震と立て続けに大地震が起きました。

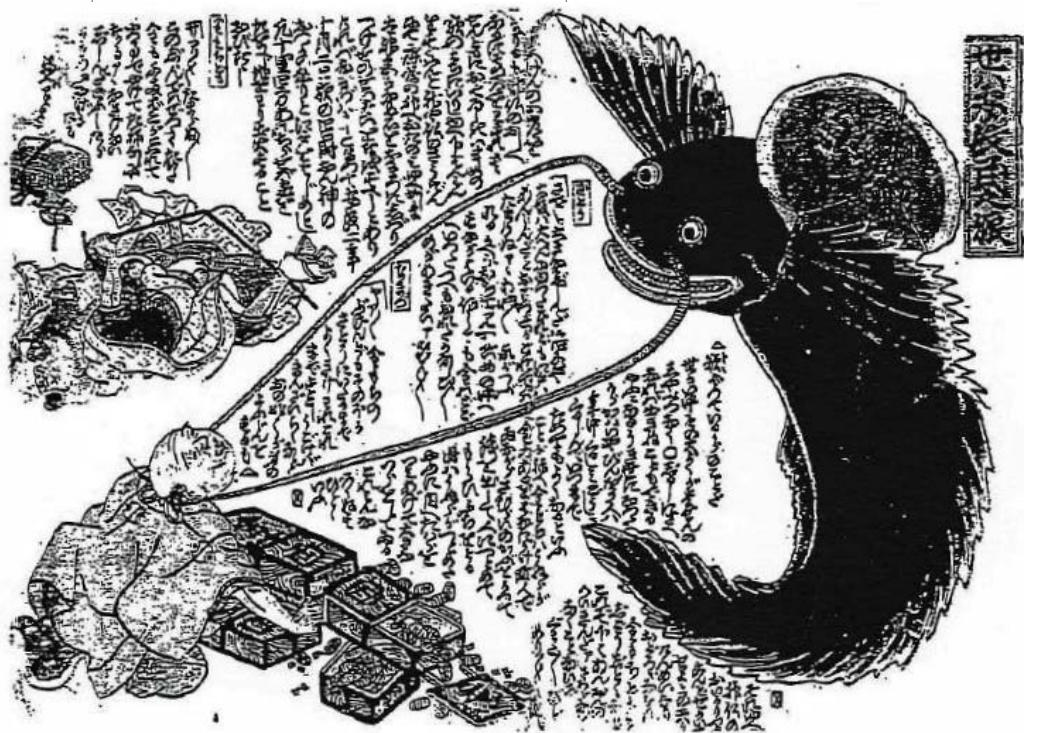
6月14日の地震では山之坊の『甚太郎一代記』での記録によると、地震により本家で生活できず、小屋住まいしたとの体験録が残っています。月ヶ瀬今西家での記録「地震帳」(奈良市指定文化財)には揺れの強さを「大大大大大大おお大地震に付き・・・」と、直下型の地震がいかにも人々を恐



いわれるはずですが、「なまず絵」の中のなまずは悪徳商人をこらしめたり、地震後の普請に当たったりしてその姿が大人気となり、そしてやがて「世直り」への期待感が起きてきます。

幕末の世相 打ち壊し

安政5年通商条約翌年から交易開始後、外国から工業製品、特に綿糸の輸入で、橿原で盛んだった綿作りや綿布、綿加工業に従事していた人に大きな打撃を与えました。米価が高騰し、農家はいいが、賃金労働者には、「上がる物価に上がらぬ賃金」となり困窮、八木でも「打ち壊し」が発生しました。(以上講演録より抜粋、全文はNPOのHPから、または事務局まで)



怖に陥れたかを示しています。

この頃、ナマズをモチーフにした瓦版が出されるなど「なまず絵」の流行が起きます。「ナマズは地震の元凶」と

参考文献

大和国高瀬道常年代記(清文堂史料叢書)清文堂出版 1999-01
高瀬 道常 広吉 寿彦 谷山 正道

八木のいろいろ情報

五條新町のまち歩きレポート

五條新町には、また町歩きに来てみたいと思わせる魅力がありました。



それは町の歴史の中では、天誅組の悲話を見てきたかのように上手に話されたボランティアガイドの老婦人のとっておきの話をもっと聞いてみたいと思ったせいかもしれませんし、あるいはこの町が好きだと言う方、重伝建地区選定に奔走された町の方、町の魅力継承のため新しい事に取り組もうとしている方・・・などの町への思い入れが伝わってきたせいかもしれません。



通りは、これがたぶん魅力アップにつながっていると思われる、少し道幅が狭いことと(八木の下ツ道の2/3)、江戸時代から暮らされていて往時の良さがそのまま残るお宅、町並みを意識して改造された家、歴史的な町屋、雰囲気のあるお店やレストラン、昔ながらの饅頭屋、旅館などが約500mのあいだにほぼ隙間なく建っていて、それらのお宅すべてが今もそこで暮らしていることで、通りを歩いていると、自分がこの町の住民で、気軽に自宅に入って世間話でもしたい思いにかられる、懐かしい町の原風景が漂う場所でした。また、家々の軒先には「やまとてまり街

道」と名付けて童謡に謳われた「まりと殿さま」の可愛い手鞠が吊るされていました。

これからは五條ならではの歴史、文化が感じられる町の資産や近辺の自然や史跡をいかして魅力のある重伝建地区五條を内外に発信していかれるようです。

私達の八木も1400年以上前からある下ツ道を今も使っていること、江戸時代からの町並み、町屋が残る町で日々暮らしが続いているところは、五條と共通点がありますが、八木ならではの町の資産とその発掘・活用、また周囲のメジャー級の歴史・文化を活用して、八木らしい歴史の感じられる町にしていきたいと思いました。

写真左上:栗山家住宅(慶長12年(1607)の棟札があり、民家としては年代の明らかな日本最古のもの)

写真左:五新線跡。かつて旧国鉄五条駅と新宮駅を結ぶ計画だった未成線。



「大和八木まち創り会」紹介

「大和八木まち創り会」は平成15年より活動を始めた「八木を愛する会」のまちづくり活動を原点に平成21年組織の強化と活動の方向や継続性をより明確化して結成されました。現在会員は約40名(会長:松塚彦一)で「豊かで安全で安心して暮らせる潤いのある町づくり」を目的にして活動をされています。地域の賑わいの拠点づくりのためにJR畷傍駅舎を活用して「まちおこし



フェスタin八木」(写真↑)と「畷傍駅貴賓室公開」を毎年実施し、地元の畷傍高校吹奏楽部や八木中学校のマーチングバンドに出演頂きながら、町の活性化に繋げていきたいと考えています。



また一昨年より八木「愛宕祭」の魅力アップにと愛宕神社が祀られている春日神社境内で立山の奉納と夜店を実施して(写真↑)地域に頼りにされる活動団体となっています。

今年には会の目的と将来のまちづくりの方向性をより明確にして、また他地域、他団体との連携を図りながら八木の歴史や文化、魅力をアピールしていくためにNPO法人の認可申請をされています。

一般社団法人
住まい・まちづくり担い手支援機構

この新聞は、一般社団法人・まちづくり担い手支援機構の「住まい・まちづくり担い手事業」のご支援により刊行しております。

特定非営利活動法人
八木まちづくりネットワーク